

主 題：霊とまことによって

聖書箇所：ヨハネの福音書 4章19－26節

●デヴィッド・フォスター・ウォレス

皆さんはデヴィッド・フォスター・ウォレスという人物の名を耳にしたことはあるでしょうか。多くの方はご存じないと思いますが、この人物はいろんな作品を書き記し、受賞したこともあるような、ひとりのアメリカの作家でした。そんな彼が今から20年前、ある大学の卒業式に呼ばれて卒業生に向けて一つのスピーチをしたのです。彼自身は別にクリスチャンだったわけではありません。しかしそのスピーチの中で彼は、「礼拝」というものに関して語っていました。この世の中の現状を目の当たりにしたひとりの人物が、次のようなことばを残していたのです。「日々の暮らしにおいて、実際には無神論というものは存在しません。礼拝しないという選択肢はありません。誰もが何かを礼拝しています。我々にできる唯一の選択は、何を礼拝するかです。神やら霊的なもの—それがキリストであれ、アラーであれ、ヤハウエであれ、母なる女神であれ、四諦（したい）であれ、あるいは破られることのない倫理原則であれ—を選択すべき理由は、これら以外のものを礼拝すれば、それらに食いつくされてしまうからです。もし金や物を礼拝し、そこに人生の意味を見いだそうとすれば、いつまでも満足することはありません。十分だと感じることはないでしょう。これは事実です。自分のカラダや美しさ、性的魅力を礼拝するならば、常に醜さを覚え、時が経ち、老いを感じ始めると、実際に墓に入る前に何百万回も心の死を経験することになるでしょう。…力を礼拝すれば、最終的には自分の弱さや恐怖を感じるようになり、その恐れを麻痺させるために、更に力を求めるようになるでしょう。知性や賢く見られることを礼拝すれば、常に自分が愚かで、偽物だと感じ、いつか正体がバレるのではないかと怯えて生きることになるでしょう。こうした礼拝が厄介なのは、それ自体が邪悪だとか罪深いとかいうわけではなく、無意識に行われているということです。それが私たちにとって初期設定なのです。」と。このことばを記したデヴィッド・ウォレスは、キリストを全く知らない者でした。でも、そんな彼のことばの中にも考えさせられる大切なポイントが含まれていました。それは、私たちにとって「礼拝」は、選択肢ではなく、初期設定だということです。

そのことに関してはみことばも同じように教えていましたね。もともと創造の初めから、すべての者は世界の創造主である神様の栄光を現す者として、礼拝者として造られました。イザヤ43：7にもこう言われています。「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」、すべての者は例外なく礼拝者として造られました。その目的に反して神様に逆らった罪人たちもみな、礼拝者でなくなったのではありません。ただ、本来感謝すべき造り主の代わりに、別のものを礼拝するようになったに過ぎないのです。ローマ1：21、25にもこう書いています。「:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。…:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン」。例外はひとりとしていません。ここにいるひとりひとりも同じです。ある人は熱心に礼拝をして、ある人はいっさい礼拝をしないのではありません。すべての人たちは生まれながらに、だれか

や、何かを心の中で追い求め続けている、そんな礼拝者として生きているのです。問われるのは、今いったい何に対して、どのような礼拝をささげているのかということです。

そして私たちをお造りになった神様は、ご自身が望まれる真の礼拝というものの姿を私たちから隠しておられるのではありませんでした。みことばを通して、それがいったいどのようなものなのかをはっきりと示しておられるのです。きょう私たちは、前回の続きのヨハネ4：19－26までを見ていきますが、その箇所を見る前に少し19－24節だけを見ても、あることばが何度も繰り返されていました。何が繰り返されているか気づきますか？ここには「礼拝」、「礼拝者」ということばが、合計10回にもわたって登場するのです。ですから、今から見ていこうとするその箇所は、間違いなく「礼拝」について私たちに教えてくれていました。神様が喜ばれる礼拝とはどのようなものなのかについて、時間をとって改めて考えてみたいと思います。まず流れを思い返すために16節から読みますので、16－26節をよく見てください。

ヨハネ4：16－26

「16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」19 女は言った。「先生。あなたは預言者だと思います。20 私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。24 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」」

さて、神様が喜ばれる礼拝の姿というものを考えていく前に、前回学んだ内容をいま一度思い浮かべてみてください。私たちが見ていた場面は、疲れ切って井戸に腰掛けていたイエス様と、そこに水を汲みにやって来たサマリヤの女との出会いでした。一般的に水汲みというのは重労働の一つでした。それゆえに当時の女性たちは何人かが一緒になって、涼しい朝や夕方などの時間帯に水汲みを行うというのが習慣でした。しかしながらこの女性は、だれも来ないような真っ昼間にただひとり井戸にやって来ていたのです。なぜか？それは彼女の乱れた生活に原因がありました。彼女は結婚と離婚を何度も繰り返してただけでなく、あげく夫でない者と同棲し、姦淫に姦淫の罪を積み重ねていたのです。彼女はそんな自分自身を恥じていました。また周りの者たちも関わりを持ちたくないと思っていたからこそ、彼女はたったひとり、孤独でした。先週も見たように、そもそもユダヤ人から汚れた存在として軽蔑されていたサマリヤ人。そのサマリヤ人の中でも彼女は嫌われていた者でした。拒絶された者の中でも拒絶された者。人の目には、この女性ほど救いや神様から遠く離れていると思われる、そんな存在はいなかったのです。

しかしそんな罪深い者にも、救い主イエス様は大きなあわれみを示していました。失われた者を救うために来られたこのお方は、だれもがその存在を無視するような者に手を差し伸べて、渴いた心に本当

の満足を与えることのできる、そんな生ける水を与えようとされたのです。どれほど罪に汚れて、どれほど墮落した者であったとしても、イエス様の救いの御手が届かない、イエス様の御手から遠く離れ過ぎているような者はいませんでした。恵みによってもたらされる救いは、心からキリストを信じ受け入れるすべての罪人に分け隔てなく与えられるのだと。それこそが彼女にとっても最高の知らせであり、私たちにとっても最高の知らせでした。ことばで言い表すことのできない主の愛の深さというものを、私たちはここに見ることができたのです。

ここでちょっと想像してみてください。サマリヤの女は、イエス様のことばをどう感じていたでしょう？言うまでもなく、最初は当然困惑したでしょう。普段いっさい関わりのないユダヤ人の男性から突然声をかけられたのです。また加えて、霊的な問題を指摘し続けるイエス様のことばの意図を、最初彼女は理解することはできませんでした。でも、出会ったばかりの人物が自分の隠したい過去の罪から何もかもを言い当てるのです。しかも、自分が最も恥じているような部分に至るまで、事細かにイエス様はご存じでした。それを知った時、間違いなく彼女は大きな驚きを、衝撃を受けたでしょう。そして次第に井戸で出会ったイエス様が普通の存在ではないことに気づいていきました。だから、彼女は自分の罪に関して明らかにされたその時、それを否定して打ち消すのではなく素直に受け入れて、こう結論づけていたのです。罪が明らかにされた後、彼女はこう言いました。「…「先生。あなたは預言者だと思います。」」（19節）と。まだこの時は自分と話しているのがキリスト本人であるとは完全には気づいていませんでした。それでもサマリヤの女はイエスの持っている知識が人からのものではなく神様からのものに違いないと考えたのです。

そして「あなたは預言者に違いありません。」、そんな存在に向かって彼女は次の疑問を投げかけていくのです。続く20節はこのように書かれていました。「私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」と。この部分を読む時、ちょっと不思議に思う人もいるかもしれません。気づかれたかと思いますが、自分自身の罪について指摘されたサマリヤの女は、ここで急に礼拝について話題を変えていくのです。この急な話題の転換に関して聖書注解者の中には、彼女が自分の墮落したその生活、罪の問題が言われたから、それからどうにか話をそらそうとして話題を変えたというふうに考えている人たちもいます。私たちもそれをすることがありますね。自分の犯した何かの罪や隠したい出来事があった時に、それが周りのだれかに見つかったような時、恥ずかしさや気まずさから、何とか話題を変えようとすることもあります。でも、おそらく彼女の場合はそうではありませんでした。彼女は何も自分のしたことをごまかそうとして話を変えていたわけではありません。そうではなく、自分の罪深さというものを心から認めた彼女は、主の前に正しいことをしたいと願ったのです。これまで神様以外のものに満足をずっと求め続けてきた彼女は、それを悔い改めて赦しを求めて、主に喜ばれる礼拝をささげたい、と望んだのです。だからこそ彼女はまず、神様に喜ばれる礼拝をささげるにはどうすればいいのか、どの場所でささげ物をささげればいいのか、それをイエス様に素直に尋ねていたのです。それが証拠に、イエス様も話題を変えたサマリヤの女を戒めはしませんでした。むしろ真の礼拝について喜んで教えようとしていたのです。

▶2017年版：「イエスは彼女に言われた。「女の人よ。わたしを信じなさい。…」」 21節

今私たちのうちの多くが持っている新改訳の2版と3版の訳には、あらわれてはいませんが、実は原文や2017年版の訳を見ると、もともと21節はこのように始まっています。「イエスは彼女に言われた。「女の人よ、私を信じなさい。…」」と。「女の人よ」、「女の方よ」という表現。ヨハネの福音書を今まで学んできましたけれども、以前どこかで聞いたことはありませんか？このことばは前に見たカナの

婚礼、もしくは十字架の上でイエス様が母親に対して敬意を持って優しく呼びかけていたのと同じ呼び方でした。要するに、サマリヤの女——だれもが忌み嫌っているような、だれからも無視されるような女性に対してイエス様は、「女の人」と、礼拝することを求めるそのサマリヤの女に敬意を払って、そして続けて深いあわれみを示そうとされていたのです。それが、イエス様の姿でした。

○神様が喜ばれる“真の礼拝”とは

そして実際に、ここからイエス様は彼女に対して、「神様が喜ばれる真の礼拝とはいったい何なのか」を大きく二つ教えていました。真の礼拝に欠かすことのできない特徴をきょうは二つだけですが、それぞれ順番に一緒に考えてみましょう。

1. 真の礼拝とは場所にとらわれないもの 21節

まず、神様が喜ばれる真の礼拝の一つ目は、「場所にとらわれないもの」です。21節はこのように続いていました。「イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。」、ここでイエス様は「この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます」と場所について触れていましたが、何を言わんとされたのでしょうか？なぜこの二つの場所に触れたのでしょうか？そのことを正しく理解する上で、再びユダヤ人とサマリヤ人との関係性に、二つのグループにあった歴史的出来事に目を留めてみるのが大切でした。

ちょっと思い出してください。覚えていますか？あのモーセの時代までさかのぼってみると、神様はイスラエルの民に向かって、ある一つの命令を与えていました。その命令というのは簡潔に、「民たちが、神様が選ばれる一つ場所に行って礼拝をささげる」というものでした。申命紀12:5にこう書いていました。「ただあなたがたの神、【主】がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」と。ある選んだ場所があり、そこに行くことが求められました。ですから本来であれば、すべての者はこのみことばに従って、みなその共通の場所に行って、そこで神様を礼拝するはずでした。でもユダヤ人とサマリヤ人は、この全く同じことばから異なる二つの結論を導き出すのです。彼らはそれぞれに自分たちが選んだ場所、サマリヤ人にとってはゲルジム山、ユダヤ人にとってはエルサレムこそが礼拝にふさわしい真の場所なのだ、と言い張って互いに譲らなかったのです。では、いったいなぜ同じことばから二つの異なる場所を選ぶようになったのでしょうか？

もちろんこれには理由がありました。まずユダヤ人の方から考えると、ユダヤ人というのは言うまでもなく旧約聖書のすべてを受け入れていました。皆さん、これが鍵です。そしてその旧約を通して、エルサレムこそが神様を礼拝すべき場所、神殿が置かれるべき場所なのだ、と何度も何度も言われているからこそ、彼らはそれに素直に従ったのです。例えばⅡ歴代誌6:6にはこう書いています。「『ただ、エルサレムを選んでそこにわたしの名を置き、ダビデを選んでわたしの民イスラエルの上に立てた。』」と。はっきりと書いていましたよね。エルサレムを選んで、そこに私の名を置いたと。詩篇にもこのように書いています。詩篇78:68「ユダ族を選び、主が愛されたシオンの山を、選ばれた。」と。また同じ詩篇132:13にも、「【主】はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。」と記されていました。ですから、旧約のすべてを受け入れていたそのユダヤ人たちは正しいことをなしていたのです。旧約全体を通して語られているとおりに、彼らはシオンの山を、エルサレムの神殿で、エルサレムの場所で、そこに神殿を建てて礼拝をささげていたのです。

その一方で、サマリヤ人たちは違っていました。彼らは旧約聖書すべての権威を認めるのではなく、最初の五つの本だけ、モーセ五書だけを受け入れていました。言い換えると、歴代誌や詩篇なども含め

てほかの書は全部拒んでいたのです。そうするとどうなります？モーセ五書にはまだ神殿を建てるその場所というのが具体的には示されていませんでした。歴代誌や詩篇には書かれていますけれども、彼らはそういった箇所を全部除いていたわけです。彼らは神様がエルサレムを選ばれたということは全く知りませんでした。だから代わりに、モーセ五書の中で重要な場所として何度も何度も描かれているゲリジム山を礼拝の場所として選んだのです。

このゲリジム山というのも、モーセ五書の中を見ればとても大切な場所として何度も出てきます。例えば、あのアブラハムが約束の地に入って、最初に祭壇を築いた場所がゲリジム山のふもと町の、シェケムでした。創世記 12 : 6-7 にこう書いています。「:6 アブラムはその地を通って行き、シェケムの場、モレの樅の木のところまで来た。当時、その地にはカナン人がいた。:7 そのころ、【主】がアブラムに現れ、そして「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と仰せられた。アブラムは自分に現れてくださった【主】のために、そこに祭壇を築いた。」と。アブラハムだけではありません。あのモーセもそうでした。モーセも祝福を与えるために民に立つように、と命じた場所もゲリジム山でした。申命記 27 : 11-12 「:11 その日、モーセは民に命じて言った。:12 あなたがたがヨルダンを渡ったとき、次の者たちは民を祝福するために、ゲリジム山に立たなければならない。…」と。わかりますよね。こうして見ると、モーセ五書の中では、ゲリジム山は特別な場所として挙げられているのです。エルサレムの神殿のことをかたくなに認めようとしなかったサマリヤ人たちは、そこではなくて、この特別な場所であるゲリジム山にあって熱心に礼拝をささげていたというわけです。

想像できますか？先週も触れましたが、ユダヤ人とサマリヤ人との間には、もういっさい関係を持たないほど、互いの中で激しい憎しみがありました。互いにいがみ合っていたのです。純粋なユダヤ人たちは、外国人と混ざり合ったようなサマリヤ人を軽蔑して見下していました。彼らの間には大きな、大きな壁があったのです。しかも、彼らの間には絶えることのない、礼拝の場所に関しても論争がありました。サマリヤの女はそのことを知っていたのです。だからサマリヤの女もこの時、同じように困惑しました。「私たちの父祖たちはこのゲリジム山で礼拝しましたが、あなたがたユダヤ人は、礼拝すべき場所はエルサレムだと言っています。いったいどっちですか。神様を礼拝したいけれども、神様を礼拝するのにふさわしい場所はエルサレムなのでしょうか。それともゲリジム山なのでしょうか……」と。そんな困惑を覚えていたこの女性に、イエス様は言われたのです。「あなたがたが父を礼拝するのは、このゲリジム山でもなく、エルサレムでもない。そういう時が来ます」と。

言わんとしていたことは明白でした。神様に礼拝をささげるのは、どこに行くのかとか場所の問題ではないということです。真の礼拝というのは、特定の場所に縛られるものではなく、もうなかったのです。むしろキリストにあって救われたそのような信仰者にとって、真の礼拝とは、何をするのか、どこに行くのかよりも、どのようにして自分自身を神様にささげて生きるのかでした。私たちはよく知っています。ローマ 12 : 1 に書いてあるのです。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」と。

ですから皆さん、これまで何度も聞いてきました。「礼拝」というのは、こうして日曜日に兄弟姉妹と一緒に集まってささげるもの、これもそうです。でも当然これだけではありません。だから毎週教会に行ってさえすれば、毎週この場に来て日曜に礼拝をささげてさえいれば、後の時間は何をしても大丈夫、そんな問題ではありません。真の礼拝者というのは、神様に受け入れられる備え物として、日々、どんな時も、どんな場所にあっても、自分自身を神様に従わせようと生きる者でした。キリストを通し

てささげていくその礼拝というのは、どんな場所でも変わらずにささげられるべき、そんな神様に対する心からの礼拝だったわけです。場所にとられるものではないのだと。

2. 真の礼拝とは霊とまことによってささげられるもの 22-24節

そしてこれに加えて大切な二つ目に言える、神様が喜ばれる真の礼拝とは、「霊とまことによってささげられるもの」だということです。続きの22節からこう書いていました。「:22 救いはユダヤ人から出るのですから、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」と。神様の前に正しい礼拝をささげたいと願っていたサマリヤの女。そんな彼女は当然ながら、これまではサマリヤ人の方法とユダヤ人の方法という二通りの礼拝の仕方しか知りませんでした。でもそこでイエス様は彼女に、ほかのだれでもない神様ご自身が求めておられる真の礼拝者の姿とはどんなものなのか、を明らかにされていたのです。そしてこれは、以前のこの二通りの方法が抱えていた問題をも明らかにするものでした。

どういうことか？ちょっとイエス様のことばに注目してください。まずサマリヤ式でささげられていた礼拝というのは、この時点において大きなものが欠けていました。何だと思いませんか？彼らは真面目で熱心に礼拝をささげていたかもしれません。でもイエス様はこう言われました。「彼らは知らないで礼拝をささげている」と。彼らは知らないで礼拝をささげていました。彼らの礼拝というのは、喜びや情熱にはあふれていたかもしれませんが、でも喜びや情熱にはあふれていたとしても、肝心な神様に関する適切な情報は持たずして、無知のままなされていたものだったのです。でもそれもそのはずですよ。なぜならサマリヤ人は旧約聖書のモーセ五書以外のものを拒んだのです。明らかにされている神様のその偉大さに関する知識というものを、彼らは限ったのです。その礼拝というのは、「真理」において、「まこと」において、欠けていたものでした。サマリヤ式の礼拝は、「まこと」において欠けていたものでした。

また同時に、ユダヤ式の礼拝というのも、同じように大きなものが欠けていました。確かに彼らがやっていたことはすばらしいことでした。彼らはサマリヤ人とは違って、旧約のすべてを認めて、正しい知識を持っていました。そのことをイエス様が否定しているわけではありません。彼らは知って礼拝をささげていたのです。でも彼らの多くは、特にこの当時パリサイ人がささげていたその礼拝は、残念ながら心のいっさい伴っていないうわべだけのものになっていました。覚えていますか？少し前に見た2章のところでも、イエス様が主の宮に行かれると、本来礼拝の場所であるはずの、祈りの場所であるはずの主の宮を、商売の場として変えていた者たちがいたのです。だれでしたか？それはユダヤ人の指導者たちでした。彼らは律法を守ったり、みことばを覚えたり、多くのものをささげたり、祈ることなどにおいて最も熱心な者たちではありました。ただ彼らのささげていた礼拝は心が伴っていない、心が離れてしまっている、「霊」において欠けていたものだったのです。だからこそイエス様も、そんなパリサイ人や律法学者たちに対していろんな場で厳しい非難を口にしました。例えば、マルコ7：6-7でもこう言われていたのです。「:6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。:7 彼らが、わたしを拝んでも、むだなことである。…』」。

ですから、かつてこのようにしてささげられてきたこの二通りの礼拝は、どちらも不完全なものでした。一方は「まこと」において、つまり「真理」において欠けていて、もう一方は「霊」において、つま

り「心」において欠けていました。父なる神様が求めておられる真の礼拝者には、どちらか一方ではありません。必ず、両方の要素が求められていたのです。

立ち止まって、ちょっと考えてみてください。果たして、皆さん自身がささげているこの日曜日の礼拝、日曜日以外の日々の礼拝、それらは、そもそも神様の前に受け入れられるようなものなのでしょうか？「霊」と「まこと」、このどちらかが伴っているものなのでしょうか？それともどちらかが欠けているようなものなのでしょうか？これは私たちにとって非常に重要なことです。ですから、もう少しだけ詳しく「霊とまことによって礼拝する」とはどういうことなのか、その意味を一緒に考えてみましょう。

まず、「霊によって礼拝する」とは、何を意味しているのでしょうか？ここでいう「霊」というのは、人の内側の部分……魂の部分、思いや感情、意志、動機、そういったものを含めたすべての部分を指していました。皆さん、私たちの礼拝というのは、愛する偉大な神様に向かって、心の底からあふれ出てくる喜びの表れでした。賛美の表れでした。いい加減に、片手間に、嫌々ながら、そのような冷めた思いからささげるものでは決してないということです。かつての信仰者たちも、このことをよくわかっていました。例えば、あのダビデもこう言いました。詩篇103：1「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。」と。また、マリヤもこのように実際に賛美していました。ルカ1：46－47に、「：46 マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、：47 わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」と。

皆さん、私たちは神様の命じておられる正しいことを、するべきことをなしていくことは、いくらでもできます。毎週のように忠実に教会に通うことも、礼拝をささげることも、みことばを学んで、みことばを覚えて、賛美をささげて、祈りをして、教会で奉仕をすることもできます。周りの人たちが見て真面目で熱心な人物だと見られるようなことをすることさえいくらでもできます。人間的に考えてみれば、まさにパリサイ人がそうでした。宗教に熱く、みことばを知っていて外面だけ見ればすばらしい生活を送っていた人物はほかにいなかったのです。でも、神様の求めている真の礼拝者に問われていたのは、外側ではありません。心の伴ったものでした。うわべだけ、見せかけだけの正しい行為、行いは、いっさい求めていなかったわけです。清教徒のひとり、スティーブン・チャーノックという人物も、この点に関して次のようなことばを残していました。「心のない礼拝は存在しない。それは舞台での演技であって、本当は自分ではない人の役を演じているに過ぎないのである。偽善者という言葉の本来の意味は、舞台役者である…私たちはたとえ完全でなくとも、神を礼拝していると言えるかもしれない。しかし、もし誠実さを欠いているなら、もはや神を礼拝しているとは言えないのである。」と。皆さん、心が伴っていない行為、それも私たちは「礼拝」と言うかもしれません。でも、神様から見れば、それは単なる舞台役者としての行いでした。どうでしょう？私たちがささげる礼拝は心が伴っているものなのでしょうか？自分の内にあるすべてでもって、思いであれ、感情であれ、動機であれ、意志であれ、そういったいろんなものでもって、いつもあわれみ深い最高の神様を喜びながら、感謝し、礼拝をささげようとしているのでしょうか？

ちょっと皆さん、考えてみてください。こうして私たちが日曜日に礼拝に集うことも、日々の生活の中で礼拝をささげることも、私たちにあってそれは本当に楽しいことでしょうか？皆さん、楽しんでいきますか？神様を礼拝できることを。それとも神様を礼拝すること以上に楽しいことがありますか？もしそうだとすれば、自分自身の心をよく考えてみる必要があります。本来であれば、キリストによって救われて、神様との関係が修復され、その神様を味わうことができるというのは、私たちにあって何にも

変えがたい喜びのはずです。神様に受け入れられる礼拝というのは、神様のすばらしさを覚えて、神様への愛や感謝にあふれた、そういった「心」から、「霊」によってささげられるものでした。

でも、それだけではありません。同時に、真の礼拝者に求められていたのは「まことによって礼拝する」ということでした。「まことによって礼拝する」とは、何を意味しているのでしょうか？ここで言う「まこと」とは、簡潔に言えば「聖書を通して明らかにされた揺るがない真理、変わらない神様のことば」でした。つまり私たちの礼拝というのは、それぞれの気分とか、それぞれの思いに左右されるものではありません。それぞれの体験に基づくものでもありませんし、また礼拝というのは、ただ私たちの感情をかきたてて良い気持ちにさせるようなものでもありません。神様に受け入れられる礼拝というのは、常に、常に、真理に根差したもののなのです。言い換えれば、真の礼拝者にとってみことばというのは、あった方が良い一つの要素なのではありません。それはなくてはならない、絶対に欠かすことのできない、私たちの礼拝の根幹、基盤だったわけです。ジョン・ストットという神学者もこんなことばを残していました。「御言葉と礼拝とは互いに切り離すことができません。全ての礼拝は、神の啓示に対する知的かつ愛に満ちた応答であり、すなわち、それは神の御名を崇めることなのです。」と。

だからこそです、皆さん。こうして私たちが日曜日とともに集まって賛美をしたり、祈りをささげたり、何よりも聖書を開いてみことばを学ぶのは、ただ知識を蓄えるためではありません。皆さんがいろんな交わりで学びをすることも、それぞれ家庭にあって日々の生活の中でみことばを忠実に学んでいくということも、単にそれはそれぞれがこなすべき課題でもありません。そうではなく、私たちがますます神様のことを深く知っていけば、神様への信頼や愛が増し加わり、そしてその信頼や愛というものが、私たちの心でさらなる神様への喜びや賛美となって、あふれ出るようになるためです。みことばの理解によって生み出された心の底からの感謝こそ、まさに礼拝者にとってふさわしい態度でした。だから、もし皆さんの中で「いや、私はあまり神様に対する感謝が出てこないんです。喜びが出てこないんです。」と言われるのであれば、一つ問えるのは「どれぐらい神様と時間をとっていますか？」ということですが。神様のことを知ってもいないのに、神様と時間をとっていてもいないのに、別のものに時間を費やしているのに、喜びが出てこないと言うのであれば、ある意味それは当然でしょう。私たちのささげる礼拝というのは、常に真理に基づいたものでなくてはいけないのです。どうでしょう？皆さんご自身、日々の歩みの中において、神様のことばにいつも満たされて、知識において成長して、そして知識において成長するだけではなくて、それで知った神様に栄光を帰す者として、最高の神様を礼拝する者として歩んでいるでしょうか？神様に受け入れられる礼拝は、みことばだけに堅く根差して、神様の偉大やすばらしさを知った応答として賛美をささげる……それが、「まこと」によってささげる礼拝でした。

皆さん、忘れてはいけないことは、礼拝のあり方を決めるのは、礼拝者たちではありません。礼拝のあり方を決められるのは、その礼拝を受ける神様だけです。続きの24節にもこう書いていました。

「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」、また出てきました、「～しなければなりません」と。神様がキリストを通して礼拝をささげるすべての礼拝者に求めていたのは、「霊」だけではありません。「まこと」だけではありません。「霊とまこと」の両方によってささげられる礼拝でした。それ以外は拒まれる、ということです。そして、そのようにしてみことばに従順にささげられる心からの礼拝は、神様が喜んで受け入れてくださるということです。私たちがいくら礼拝をささげている気になったとしても、神様が求めている礼拝者の姿でなければ、それは拒まれてい

るということです。「霊とまこと」つまり「心と真理」によってささげる礼拝、それが、神様が喜んでくださる真の礼拝でした。果たしてそんな礼拝者として、今生きているでしょうか？

最後に、もう一度だけみことばに戻ってください。思い返していただくと、これまでの流れで、拒絶されたサマリヤの女は最初、自分の罪深さに恥ずかしさを覚えながら、たったひとりで井戸にやって来ました。しかしそこで待っていたあわれみ深い救い主は、そんな彼女にも救いの手を差し伸べられていました。その心に働いて、父なる神様を礼拝する者として彼女を変えられたのです。いったいどうして、どこにイエス様のそんな力があったのでしょうか？それは皆さん、この方こそ約束されていた救い主、また何よりも偉大なまこと神、ヤハウェだったからです。続きにこう書いていました、25-26節「女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」」、このことばを聞いた時、彼女はどんなに大きな喜びを抱いたでしょう。日々の渇きを満たすためにやって来たその井戸で、神の子イエス・キリストと出会った彼女は救われ、本当の満足を見出しました。

そして注目してほしいのは、彼女はその後すぐに何をしたのかということです。喜びにあふれた彼女は自分の持ってきた水がめを置いて、町に行きました。軽蔑され、除け者にされているそんな町の中に行き、彼女はこう告げ回ったのです。来週見ますけれど、4:29でこんなふうに言われていました。彼女は言うわけです。「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのではないでしょうか。」と。キリストと出会って喜びや感謝に満たされた彼女にできたことは、ただその喜びをほかの人にも宣べ伝え、その感謝を神様にささげることでした。そしてこれが、まさに真の礼拝者の姿でもあったのです。

最初にも言いました、私たちはみな、生まれながらに礼拝者として生きています。昔も今も変わりません。この世界を造られた神様は、ご自分のことを愛して、ご自分に喜んで従ってくる、そんな真の礼拝者を求めておられます。どうでしょう？私やあなたはきょう、何に心を向けているでしょう？霊とまことによって神様を心から礼拝する者として歩んでいこうとされているのでしょうか？それとも、神様以外の何かを求めて、いつまでも渇きや不満足を覚えていないのでしょうか？みことばが教えてくれること、それは、神様を愛して神様を礼拝して生きていく、その本来の目的、本来の姿こそ、私たちに本当の喜びを、本当の満足を与えてくれるものだということです。私たちをあわれみによって救ってくださった方、偉大な主、このお方にどんな時も栄光を帰して感謝する、そんな礼拝者として今週もともに歩んでいきましょう。